The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 現代における銘木の存在とその意義の模索 ： 銘木消費と日本人の自然嗜好 |
| Author(s) | 岡田, 涼子 |
| Citation | デザイン理論. 2018, 71, p. 20-21 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/67713 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 現代における銘木の存在とその意義の模索
## ── 銘木消費と日本人の自然嗜好 ──

岡田（泊里）涼子／武庫川女子大学生活環境学専攻博士課程

### １．はじめに（研究の背景と目的）

日本では古来より，木を素材とした造形物が多く作り出されてきた。その木材の加工技術と共に，質や意匠による使い分けの知識が職人や専門家の間で受け継がれてきたが，それらは口頭や感覚的な伝承による性質が強いことから，時代の流れと共に変化を余儀なくされ，衰退または消失の危機にあるものも少なくない。本研究では，木材の中でも，銘木と呼ばれるものに着目し，銘木の現状とその意義を探ることで現代の人々の素材への認識や嗜好について探ることを目的とする。

### ２．銘木とは

「めいぼく」には「名木」と「銘木」の表記があり，前者は神木や霊木のように，人々の崇拝の対象としての意味合いが強い。後者は「銘」の字の意味から，素性や品質が明らかで，上等，上質な木材と捉えることが出来る。本研究では，後者の意味を持ち伐採され木材となったものを対象とする。

他国においてどれくらい認識されているかは不明であるが，「世界三大銘木」といわれる定義がある。これはヨーロッパなどで高級材として人気の高い，マホガニー，チーク，ウォールナットの三樹種のことを指す。この場合の銘木とは樹種そのものを指している傾向が強い。また，それぞれの木材は，家具や船の内装材などに用いられる特性を重要視されており，日本の銘木と呼ばれるものは，これらとは性質が異なっているように思われる。

### ３．日本における銘木の定義

それでは，日本では銘木はどのように捉えられているのだろうか。公益財団法人・日本住宅木材技術センターによって，銘木の定義が示されている。この定義では，材面の様子や形状，樹齢などに着眼点が置かれており，例として樹種があげられてはいるが，特定の樹種に限って示されたものではない。また，例にあげられた樹種からは，針葉樹を中心とした和建築材を対象として定義づけられていることがわかる。

更に，銘木の定義について探るために，既往文献の検証を行った。『木材工芸用語辞典』（成田寿一郎，1976）等，木工や木材加工の専門家などにより編纂された用語辞典，あるいは銘木商の著書，銘木に特化した『銘木史』（銘木史編纂委員会編，1986）や『銘木資料集成』（全国銘木青年連合会編，1986），『木の文化』（小原二郎，1972）等の文化や伝統木工芸に関する文献などから，銘木の定義についての記述を調査した。その結果，定義に関わる明瞭な記述がほぼ見られず，「趣がある」「珍しい」など，人によって判断に差のある表現が共通して見られた。また全般的に，日本では銘木の多くを国産材とし，樹種そのものよりも木材個々の質や形状，材面の様子を重視している傾向であることが読み取れた。

### ４．銘木の杢（もく）

木材の質や樹種の見分けなどは，ある程度の見識が必要になり困難であるが，銘木の条件のひとつとも言える杢については，一般的

な木材との違いが一見してわかりやすく，強弱はあっても多くの人々の目をひき，何かしらの感情を持たせるものと思われる。

一般的な木目とは形状が異なるものを杢と呼ぶ。杢は，形状の特徴を他の植物や動物，文様等に見立て多くの名前が付けられている。同じ杢でも呼び名が複数ある場合もあり，その数は定かではないが，銘木商や専門家の間で売買を円滑に行うために作り出されたものと考えられる。

杢の中には，限られた樹種にしかあらわれないものがいくつかある。網杢（あみもく）と孔雀杢（くじゃくもく）は黒柿のみにあらわれる杢だが，黒柿自体が大変稀少であるうえに，孔雀杢は最も出現率が低いとされている。孔雀の羽の模様から名付けられており，杢の黒い部分が緑がかっていることが特徴的である。正倉院宝物の調査研究などに携わった木工芸家，竹内碧外（へきがい）の「行雲流水文硯筥（うんりゅうすいふみすずりはこ）」（1970）では孔雀杢のあらわれた黒柿材が，と波状に接ぎ合わされ，杢の存在感を程よく抑えた構成になっている。

玉杢は最もよくみられる杢のひとつである。欅や玄圃梨（けんぽなし），栴（たも）などに明確にあらわれることが多く，円状の模様の数によって，雰囲気が激しく変化するのが特徴である。正倉院宝物の中の「赤漆文欟木御厨子（せきしつぶんかんぼくのおんずし）」（７世紀）は全面に欅の玉杢材が使用されている。この厨子は，大破していたものを明治時代に修理復元されており，作品名から判断すると，製造当初から欅材に赤漆が施されていたことは知ることができるが，どのような杢の材であったかまではわからない。しかし，復元に際し，このような玉杢の華やかな材が選ばれたことは注目すべき点であると考える。

縮（ちぢみ）杢も比較的よくみられる杢のひとつであるが，国産材では栃にあらわれることが圧倒的に多い。現代の木工芸の第一人者ともいえる須田賢司の作品には，縮杢が頻繁に見受けられる。また須田は，国産外国産のこだわりなく，シカモアメープルの縮杢なども使用しており，現代の銘木あるいは木材と人との関係性を象徴しているように感じられる。

## ５．銘木に関するアンケート

銘木の特殊性を鑑み，現状の把握と専門家からの意見を求めるために，平成28年８月から９月にかけて，銘木商，材木商，さらに木工家などの作り手を対象としたアンケート調査を実施した。郵送による357件の依頼に対し，86件の回答を得た。回答の分析から現在，銘木と呼ばれる木材の需要供給共に確実に減少しており，最大の原因は建築様式，工法の変化によるものと考えられることがわかった。また工芸分野における銘木使用も減少しており，木材の多様化と人々の木材への考え方にも変化が生じていることが感じられた。

## ６．考　　察

樹木の個体差が著しいように，銘木の定義を明確に定めることは困難であることが明らかになってきた。また，ある程度の定義を基準にしても，個人の感覚や嗜好の違い，さらには経験値により判断に差が出ることから，銘木の概念のあいまいさが生じていると推察する。またそのあいまいさは，「目利き」といった言葉が象徴するような，銘木商などの専門家をより特殊化させた要因とも考えられる。

銘木はその歴史をたどると，建築様式の流行と深い関わりを持つようである。また，銘木商の存在は，銘木という文化の形成に欠かすことのできないものであると思われる。今後の研究課題として，和建築材としての銘木の分析，銘木消費と銘木商の活動の推移について理解を深める必要性を感じている。